

外国人力士報道による、幻想としての『日本人』 —“桜”として「彼ら」が舞い散る日—

“Imagined Japanese” in the communication of sumo wrestlers from foreign countries

1K04B081-2

久門 怜央

指導教員 主査 リー・トンプソン先生

副査 石井昌幸先生

日本国に生まれ、日本国に住む我々が、無意識のうちに認識している「日本人／外国人」という概念は、メディアが創造した寓話の産物として存立する「幻想」である。

本論文では、この「幻想」を産出する一つの源泉として、国技・大相撲における外国人力士報道を呈示し、「日本人／外国人」の幻想性を一貫して主張していくこととする。

大相撲とはそれ自体、その歴史的背景において、「日本」の存在を自国と他国の双方に向けて発信する為の、一種の儀礼的な色彩を色濃く帯びるものである。しかしながら、個々の力士達が土俵上で勝敗を競い合い、番付上で横綱という最高の地位を目指して競い合うという意味での競技的な色彩も、大相撲は強く有している。即ち、一定の規律のもとに勝敗を競う「スポーツ」としての性格と、社会に対して何らかの意味を付与するという、広範な意味での「宗教」としての性格の双方をその表層的な部分において保持している極めて稀有な存在として、大相撲は存立している。

ところが、国技にとっての“新参者”である外国人力士の出現によって、大相撲は「宗教」と同時に「スポーツ」の側面においても、「日本人」及び、この対立概念としての「外国人」を認識せざるを得なくなったのである。

この結果国技・大相撲は、その主題となる要素が「宗教」か「スポーツ」であるかを問わず、幻想としての「日本人／外国人」を発信する、壮大な舞台装置へと変貌した。換言すれば現代の大相撲とは、一人称としての「我々＝日本人」と対象化された、三人称としての「彼ら＝外国人」の、その双方概念の呈示が行われる巨大劇場である。

即ち、各人が意識するかしないかは別として（そして恐らくは意識しないはずなのだが）、「日本人／外国人」が激突する舞台である大相撲という“土壌”を起立点にして、その激突の様子を報道すると同時に、我々の潜在意識下に「日本人／外国人」という幻想の“種”を撒き続ける相撲メディアを介することで、我々は自己の脳内回路において、大輪の幻想の“花”を咲かせているのである。

現代大相撲という舞台における、幻想としての「日

本人」像の呈示に着目した本論文は、以下の構成で論じられる。

第一章『『彼ら』の背景Ⅰ—相撲の成立過程—』では、国技・大相撲が誕生する遙か昔の古代にまで時代を遡り、日本で古来続く一種の格闘技である相撲の、その「国技」存立以前までの発展経緯を示す。

第二章『『彼ら』の背景Ⅱ—国技の誕生—』では、相撲が我が国日本における唯一の「国技」として定着した、その背景を追う。

第三章『『彼ら』の背景Ⅲ—外国人力士の誕生—』では、その長きに亘る歴史上において日本人のみで構成されてきた（と思われている）国技の世界に外国籍を有する力士が登場した、その歴史的背景を考察する。

第四章『『彼ら』の構造—三つの様相—』では、外国人力士である「彼ら」が「我々」日本人が主役であった相撲界において、その誕生以来、永続的興隆を遂げている、その構造を検証する。

第五章『『彼ら』の素描—外国人力士報道の比較分析—』では、主たる外国人力士、及びその比較対象としての日本人力士に関する報道内容を分析する。

外国人力士を巡るここまでの論理を前提として、本論文の主張は終章において明示される。

その終章『『彼ら』の意義』では、ナショナリズム形成において外国人力士が果たしてきた役割を論じ、そのうえで、外国人力士報道が呈示する「彼ら＝外国人」と「我々＝日本人」なる思想の幻想性を透徹する。

まず主要なナショナリズム論者の理論を援用しながら、ナショナリズムという概念の再構築に試みたうえで、現代におけるナショナリズムの、その構造の変遷を示す。これに続く形で、国技・大相撲における報道が呈示する「日本人／外国人」という、極めて良質な幻想性について、その構造を透徹し、最後に、今後この幻想に対して起こり得る歴史的変化として、外国人力士の＜能動的な「日本人」化＞を主張する。